

David Marrero 教授から DPP に込めたメッセージを聞く

第31回米国糖尿病教育者協会年次集会

(31st AADE Annual Meeting)

(インディアナポリス, 2004年8月11～17日)

森川 浩子・黒江ゆり子

2004年8月11～14日, 第31回AADE(American Association of Diabetes Educators: 米国糖尿病教育者協会)年次集会が, インディアナポリスで開催された。今回の年次集会のメインテーマは, 「Driving Innovation Prevention・Education・Care」であった。米国において, 肥満はクライシスとまで言われている。米国では, 1977年から6か所のDRTC(Diabetes Research Training Center)を創設し, 国家戦略として糖尿病教育に積極的に取り組んできた。経済的に恵まれた人々は, 厳格な糖尿病管理を受けることができるが, 遺伝的素因によって糖尿病に脆弱な民族も多く存在し, コントロール不良から失意のうちに人生を終える人々も決して少なくない。DPP(Diabetes Prevention Program)の研究が, 全米規模で様々な民族を加えて, 100億円の経費を組んで行われたことも, 当然だと思えるようになった。

私たちは, インディアナに行くに当たり, Indiana University 医学部 David Marrero 教授(インディアナ大学 DRTC Director 兼任)にお会いしたいとひそかに願っていた。1979年 Indiana University では, DRTC が設置され, 糖尿病発症予防・進展阻止に対するセルフマネジメントを主な研究テーマとして, 先駆的な活動が行われてきた。

第2回糖尿病—心理と行動研究会(2002)において David Marrero 教授が DPP を講演された。教授の語る“Prevention”という言葉には, 体重減少に取り組んだ人々へのさわやかな Love Message があふれていた。David Marrero 教授に, 一通のメールを送ったところ, EASD(European Association for the Study of Diabetes)に向けて, ご多用の中を, 私たちのために, 3日間の研修プログラムを組んで下さった。

◆ DPP を事例から学ぶ

DPP は, 3,234 人の IGT(耐糖能異常)を対象に,

3群に分けて実施され, 生活習慣改善群が糖尿病発症阻止に最も効果があったことを示す重要な研究である。David Marrero 教授のもとで, Program Coordinator として, 3,234 人のデータを管理している Susie Kukman-Kelly(RN, CDE)が, DPP に参加したクライアントの記録を紹介して下さった。ケースは, 伴侶を亡くされ, 独居生活をされる 60 歳代の IGT 女性だった。彼女は, 午前中だけ仕事をすることによって, 生活の糧を得ると共に, 午後は自分の体を休めていた。彼女は, DPP に参加することで, 自分の健康状態とライフスタイルを客観的に把握し, ライフスタイルコーチとの面接を通じて, 自分の Goal Setting を行った。彼女は, 人生を前向きに生きており, ガーデニングや仕事の他に, 散歩によって活動性を高め, 糖尿病発症を抑制するというアウトカムに至った。DPP 報告書においても, 特に 60 歳以上の症例では, 対照群およびメトホルミン群と比較して, 生活習慣改善群の発症抑制率が大きかったと示されている。DPP の講演では, 3,234 人は一つの集団として紹介されるが, 一人一人のデータに接すると, 被験者とライフスタイルコーチが, どのようなリレーションシップのなかで, この研究に取り組んだか, わかるような気がした。

また, 個人記録は, Lifestyle Change を系統的にまとめており, 非常に優れた内容であった。DPP は, 全米規模で, 異なる人種や文化背景を持つ対象に対して行われた大規模介入試験である。DPP は, 多施設共同試験であるが統一性がとれており, しかも被験者の中断率が非常に少なかった。このことは, David Marrero 教授の統率力と DRTC 間の協力(6施設中4施設参加), ジョスリン糖尿病センターなど, 27カ所の研究協力施設の水準の高さがあればこそと思われた。

◆ David Marrero 教授と DPP

David Marrero 教授の著書や研究論文は非常に多いが, 筆者が著書に接したのは, “ADA 糖尿病診療のための臨床心理ガイド”第8章が初めてである。David Marrero 教授が, なぜ糖尿病患者の運動や心理社会的問題に取り組むようになったか, 私たちは何も知ることなく, 彼の研究室を訪れた。

彼は、黒帯の柔道姿の写真を見せ、柔道5段であることをうれしそうに語った。そして、自分が柔道をするのは、柔道がエキサイティングだけでなく、自分の糖尿病にも良いからだと言われた。彼のポケットのペンがインスリン注射器であることに、やっと私たちは気付いた。

彼は、カリフォルニア大学大学院で Social Ecology を専攻する学生であったが、26歳の時に1型糖尿病を発症し、糖尿病とともに生きる日々は、彼の研究を決定づけることになった。博士課程を修了し、糖尿病と運動の効果を研究するために、Indiana University DRTC に、32歳のときに就職した。その後は、サイエンティストと患者の両方の眼をもって独創的な研究をしてこられた。

また、彼が学んだカリフォルニアには、日本文化があまりアメリカナイズされずに伝承されており、自分も赤穂浪士や源氏物語が大好きであるといわれた。講演で来日した際に、赤穂浪士が眠る泉岳寺で祈りを捧げたいと思ったが、案内する人に泉岳寺を説明するのに時間がかかったと冗談を言われた。

◆ David Marrero 教授と James Dean

インディアナポリスの郊外に人口3,000人の小さな町 (Fairmont) があり、映画スター James Dean (1931 ~ 1955) の生家が残されていると旅行ガイドで知った。私たちが思春期の時にあこがれたジェームス・ディーンに会いたい…。という思いは、Marrero 教授へのメールの隅に少し書かせていただいた。James Dean は、幼児期に母親を亡くし、父親とカリフォルニアで生活するが、母親の代わりはなく、Fairmont の叔母のところ育てられた。今も Fairmont の町は、彼が子ども時代を送ったままに残されている。

カリフォルニア出身の David Marrero 教授にとって、James Dean は、今も Fellow のような存在なのかも知れない。EASD 出発の前日にも関わらず、講演原稿は鞆に詰めたから、これから Fairmont に行こうと、両手を広げて誘って下さった。

翌日、David Marrero 教授の運転する車で、スピードを上げて Fairmont に向かった。Marrero ご夫妻と私たちは、誰も James Dean に会ったこと

がないが、James Dean Museum での白黒フィルムを通じて、都会の片隅で、すねたように生きる James を熱く感じる事ができた。近代化とは無縁の Fairmont の町では、今もバラと煉瓦づくりの校舎が誰の手をかりることもなく、輝いている。それは、DPP に参加した60歳代の女性のように、銀色の光を放っていた。

1921年インスリンの発見により、糖尿病を制圧したかのように思えた「多幸症」の期間は、わずか10年で過ぎ去り、1930年代から糖尿病性合併症への対応に追われた。1945年 Joslin などによる Oxford Study で、未診断糖尿病患者の存在がわかり、早期診断・早期治療が始まった。しかし「Diabetes is a personal responsibility (糖尿病は個人が責任を負う病気である)」ということが、糖尿病診療を非常に難しいものになっている。2004年 AADE Annual Meeting においても、スクリーニングとフォローアップの重要性に関する講演が続いた。これらは、何も新しい研究ではないけれど、今もこの段階にあるのだと、複雑な思いで聞いていた。

糖尿病とともに生きる人生が、より幸せであるように…。歴史に残る仕事をされながらも、寄り道を教えてくれた David Marrero 教授に心からの感謝を捧げる。M



もりかわ ひろこ

福井大学 医学部看護学科

(〒910-1104 福井県吉田郡松岡町下合月 23-3)

くろえ ゆりこ

岐阜県立看護大学

(〒501-6295 岐阜県羽島市江吉良町 3047-1)